

氏 名	BAYARKHUU BAYANJARGAL (ばやるふう ばやんじやるがる)
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 の 番 号	博甲第 128 号
学位授与の日付	2025 年 3 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	モンゴルの中学校におけるいじめに関する研究

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	鈴木 平
	(副査) 桜美林大学教授	松田チャップマン与理子
	桜美林大学教授	山口 創
	神戸親和大学特任教授	藤原 忠雄

論文審査報告書

論文目次

第 1 章 問題提起と目的.....	1
第 1 節 海外におけるいじめの現状と研究.....	1
第 2 節 日本におけるいじめの現状と研究.....	2
第 3 節 日本におけるいじめの定義.....	5
第 4 節 日本におけるいじめ実態調査.....	7
第 5 節 モンゴルの教育事情.....	10
第 6 節 モンゴルにおけるいじめの現状.....	11
第 7 節 本論文の目的と意義.....	14
第 8 節 本研究の構成.....	15

第2章 研究1: モンゴルの中学校におけるいじめに関する研究 ―いじめ の被害・加害経験と自尊感情及びストレス反応との関連―	19
第1節 問題・目的	19
第2節 方法	24
第3節 結果	28
第4節 考察	31
第5節 今後の課題	34
第6節 研究の問題点	35
第3章 モンゴルの中学生のいじめに関する調査研究で使用する心理尺度の 標準化（その1）	36
研究2 モンゴル語版中学生用自尊感情・他尊感情尺度の標準化	36
第1節 目的	36
第2節 方法	38
第3節 結果と考察	45
研究3 モンゴル語版中学生用ストレス反応尺度の標準化	48
第1節 目的	48
第2節 方法	49
第3節 結果と考察	49
第4章 研究4 いじめの被害・加害経験と他尊感情・自尊感情・自己否定感、ストレス反応 との関連について	51
第1節 目的	51
第2節 方法	51
第3節 結果	58
第4節 考察	178
第5章 研究5 いじめの被害・加害経験に与える心理的変数の総合的影響の評 価	189
第1節 目的	189
第2節 方法	189
第3節 結果	189
第4節 考察	240
第6章 モンゴルの中学生のいじめに関する調査研究で使用する心理尺度の標準化（そ の2）	248
研究6 モンゴル語版中学生用コーピング尺度の標準化	248

第1節 目的.....	248
第2節 方法.....	250
第3節 結果と考察.....	255
研究7 モンゴル語版中学生用仲間へのサポート期待尺度の標準化.....	260
第1節 目的.....	260
第2節 方法.....	260
第3節 結果と考察.....	260
研究8 モンゴル語版中学生用教師へのサポート期待尺度の標準化.....	262
第1節 目的.....	262
第2節 方法.....	262
第3節 結果と考察.....	262
第7章 研究9 過去と現在のいじめ経験の高低による各心理尺度得点の差について	
.....	265
第1節 目的.....	265
第2節 方法.....	265
第3節 結果.....	265
第4節 考察.....	284
第8章 研究10 いじめの被害・加害経験とソーシャルサポートの関連性.	292
第1節 目的.....	292
第2節 方法.....	292
第3節 分析1 結果.....	292
分析2 結果.....	303
分析3 結果.....	313
第4節 分析1 考察.....	329
分析2 考察.....	332
分析3 考察.....	336
第9章 総合考察.....	339
引用文献.....	352
資料.....	362
謝辞	

論文要旨

博士論文の研究内容は、モンゴルの中学生におけるいじめの実態調査を行い、その背後にある心理社会的問題を定量的に分析することであった。

第一章では、日本とモンゴルのいじめの問題をリサーチし、比較検討を行った。モンゴルの中学校におけるいじめの文化的要素や社会的背景が明らかにすることで、モンゴルの教育関係者が独自の予防策と対策を開発するための基盤となるという研究全体の意義が述べられた。

第二章では、モンゴル国の首都ウランバートル市内の中学生を対象にいじめの実態調査を行い、356名の調査対象者のデータを分析することで、いじめ被害・加害経験と自尊感情との関連、いじめ被害・加害経験とストレス反応・自尊感情との関連性を検討した。しかしながら、モンゴルの中学生を対象とした心理尺度の標準化が行われていないなど、研究の方法論上の問題もあった。

第三章では、第二章の問題点をふまえて、モンゴルの中学生を対象に自尊感情・他尊感情尺度、ストレス反応尺度を標準化する試みを行った。モンゴル全国から中学生 6405名のデータを集め、分析を行った。自尊感情・他尊感情尺度を想定した探索的因子分析では「自尊感情」と「他尊感情」の他に「自己否定感」の因子が抽出された点が日本の先行研究と異なっていた。ストレス反応に関する因子は「ストレス性の身体症状」「無力感」「情緒不安定」「攻撃性の反応」が抽出された。

第四章では、第三章で作成した尺度を使って、モンゴルの中学生におけるいじめの実態を分析した。分析の結果、いじめ被害が多いほど自尊感情、他尊感情、自己否定感、ストレス反応がネガティブな方向に強まるという一貫した傾向が見られた。また、加害者の特徴としては、自己否定感情やストレス性の身体症状・無力感・情緒不安定・攻撃性の反応が特に高い傾向が見られた。いじめは被害者に大きな心理的ストレスを与えるだけでなく、加害者にも心理的な問題があることが明らかとなった。

第五章では、いじめの被害経験・加害経験と心理的変数の関連性について、判別分析を用いてより詳細に分析を行った。いじめの被害経験の内容にかかわらず、情緒不安定、無力感、自己否定感、ストレス性の身体的症状、攻撃性の反応、自尊感情、他尊感情などの心理変数が関連していることがあらためて明らかになった。同様に、いじめの加害経験の内容にかかわらず、攻撃性の反応、無力感、情緒不安定、自己否定感情、ストレス性の身体的症状、自尊感情、他尊感情などの心理変数と関連していることが明らかになり、いじめ加害経験が精神的健康と関連することがあらためて明らかとなった。

第六章では、いじめの問題への予防的介入・治療的介入の可能性を探るため、いじめ問題と関連する「コーピング尺度」「社会的サポート尺度」を標準化する試みを行った。モンゴル全国から中学生 3077名のデータを集め、分析を行った。「コーピング尺度」を想定した項目に対して因子分析を行った結果、「積極的対処」「他者からのサポート希求」「逃避・回避的対処」の三因子が抽出された。「社会的サポート尺度」を想定した項目か

らは「仲間からの情緒的サポート」「仲間からのコミュニケーション的サポート」「先生からの支援的サポート」「先生からの情緒的サポート」などの因子が抽出された。

第七章では、過去と現在のいじめの被害・加害経験とコーピング、ソーシャルサポート、およびストレス反応との関連性について分析を行った。過去・現在のいじめの両方が生徒の心理的健康に強い影響を与え、身体的・精神的ストレス反応を引き起こしていた。いじめ被害者には、回避的対処と社会的孤立が見られ、早期介入と適切なサポートが必要であると考えられた。また、過去・現在のいじめ加害経験が心理的健康に影響を与え、攻撃性や無力感が顕著に高くなることが示唆された。逃避的な対処行動やサポート不足が加害者の心理的負担を増大させ、問題解決を困難にしていることがうかがえた。

第八章では、ソーシャルサポートの高低と過去・現在のいじめ被害・加害経験の違いについて検討することを目的とした。同時に、ストレス反応についても検討を行った。分析の結果、家族、教師、友人からのソーシャルサポートが生徒のいじめ経験に大きな影響を与えることが明らかとなり、ストレス反応にも影響を与えることが明らかとなった。

第九章では研究全体を概観し、モンゴルの中学校におけるいじめ問題の解決のためにはソーシャルサポートの強化だけでなく、長期的な影響の追跡や実践的な教育プログラムの開発といった多面的なアプローチが必要であることなどが述べられた。

論文審査要旨

2024年12月13日にZoomを用いたオンラインでの口頭発表、質疑応答の後に審査会を実施した。

モンゴルでもいじめの問題が社会的な注目を集めているが、いじめ問題の実証的な研究はほとんど行われていなかった。この意味では、本研究はモンゴルの中学校におけるいじめ問題の先駆的研究として大きな社会的な意義があると言える。データの分析は詳細、かつ膨大な量におよび、論文全体で約400ページになった。大量のデータを集め、詳細に分析を行ったことは十分な評価に値するものであった。

日本での先行研究を参考にモンゴルで大規模な調査を三回にわたって行っているが、日本とは異なる社会・文化的特徴も見られた。例えば、教師によるいじめ（ハラスメント）の問題が注目されることや、ストレス反応として攻撃性の問題が見られることなど、ユニークな発見も得られた。総合考察では今後の研究の展望として、社会的な実践活動としてのいじめ問題の予防と教育的介入、心理的支援の必要性にまで言及されていた。これは著者がモンゴル国の高等裁判所に勤務しているという社会経験に由来する問題意識の表れでもあり、今後のモンゴルでの実践的な活動での活躍が期待される場所である。主査、副査全員一致して、博士論文として十分な研究水準に達していると評価し、その社会的意義の高さを認め、博士論文として合格とした。

口頭審査要旨

2024 年 12 月 13 日に Zoom を用いたオンラインで 30 分の口頭発表の後、30 分間の質疑応答が行われた。口頭発表は時間通りに行われ、博士学位請求論文の内容が適切に説明された。研究の分量が多かったため、発表では一部の内容を要約したものとなったが、わかりやすい説明がなされていた。

質疑応答では、副査の先生方からの質問に対し、的確に応答が行われた。特に大きな問題があるとの指摘はなかった。研究内容については、その社会的意義について高い評価が得られたと思われる。審査会では、審査委員全員が今後のモンゴルでの研究の発展と、いじめ問題への社会的取り組みが進むことが期待されるという認識で一致した。主査、副査全員一致して、博士論文として十分な研究水準に達していると評価し、合格とした。